

Column

上村松園の「松園」印

“Shoen (松園)” seal of Uemura Shoen (上村松園)

清らかで気品ある女性像を多く描いたことで知られる日本画家、上村松園（1875—1949）。彼女が明治33（1900）年に制作し、その出世作となった「花ざかり」には、母親に導かれる花嫁の姿が描かれています。この作品に捺された印章「松園画印」は、平野重光氏により、明治24（1891）年の展覧会で松園が三等賞を受賞した際に、副賞として贈られたものであることが明らかにされています。この印章はその後も長く、大正半ば頃まで使用されました。また、同じく長く使用されたのが、「松園」の文字を三重線で四角く囲った印章です。この印は明治36（1903）年の第5回内国勸業博覧会や、翌年のセントルイス万国博覧会への出品作、さらに明治40（1907）年に開設された文部省美術展覧会への出品作すべてに認められます。こうしたことから、松園が特定の印章を長期にわたり、愛用していたようすが窺い知れます。

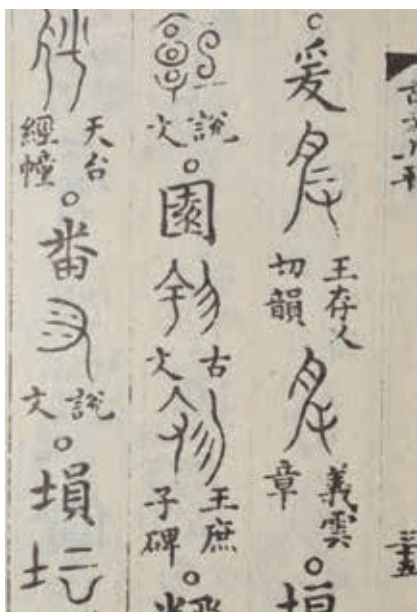
さらにもう1顆、松園が60年に及ぶ画業の中で、もっとも多く使用したとされる印章があります。この印の使用は、大正11（1922）年の第4回帝国美術院展覧会へ出品された「楊貴妃」を早い例とし、絶筆とされる「初夏の夕」（昭和24（1949）年）まで多くの作品に捺されました。特徴的なのは、その印文です。右側の「松」の字は先ほどの印章のものと近い字形で表されていますが、左側の字は解読が難しいとされ、これまで謎の印とされてきました。もともと、上村家では「松園」と読まれており、関千代氏がまとめられた印譜（『近代の美術』12、昭和47（1972）年9月）にも「松園」印として掲載されています。しかし、平成元（1989）年に刊行された『上村松園画集』（京都新聞社）において平野氏が疑問を呈され、その後もさまざまな解釈を試みられていますが、現在に至るまで決定的な釈文は示されていません。



上村松園の印章、左より「松園画印」「松園」「松園」（『上村松園画集』京都新聞社、平成元年より）

The seals of Uemura Shoen: From left to right: Painted by Shoen-ga-in (松園画印); Shoen (松園); and Shoen (松園) (from “SHOEN UEMURA,” The Kyoto Shimbun Co., Ltd., 1989)

話は中国へと飛びますが、北宋の夏竦がまとめた字典『古文四声韻』には、「園」の字の古い書体としてこの文字が掲載されています。漢字は古く、占いの際に亀の甲羅や動物の骨に刻まれた「甲骨文字」にはじまり、殷や周の時代には青銅器に鑄造された銘文を指す「金文」が現れます。春秋戦国時代に入ると文字を使う人の数が増え、都市や地域ごとにさまざまな書体が使われました。そんな中、書体を制



夏竦編『古文四声韻』掲載の「園」の書体（『汗簡 古文四声韻』中華書局出版、1983年より）

The font of the letter “en (園),” that appears in “Kobun Shiseiin (Collected Chinese characters in ancient script in four-tone rhyme-order)” compiled by Xia Song



柳沢淇園の「淇園」印（『日本書画鑑定大事典』国書刊行会、平成19年より）

“Kien (淇園)” seal of Yanagisawa Kien (from “Nihon Shoga Kantei Daijiten (Connoisseur’s Dictionary of Japanese Painters and Calligraphers),” KOKUSHOKANKOKAI INC., 2007)

定し統一を図ったのが、秦の始皇帝です。このとき定められた書体は「小篆」と呼ばれ、そこから「隸書」「草書」「行書」が生まれ、最後に「楷書」が登場しました。その間、後漢には当時すでに古代文字といえる書体であった「小篆」の字典『説文解字』が許慎によってまとめられます。「小篆」は印章に用いられる文字の基本的な書体で、同書は現在に至るまで主たる字典のひとつとして使い続けられています。その後、宋代に入ると金石学が発達し、郭忠恕により『汗簡』が、さらにその半世紀あまり後には夏竦により『古文四声韻』が編纂されます。いずれの書も当時見ることでできた「小篆」以前の文字資料を網羅的に取り込んだ字典で、特に後者は前者の基礎の上にまとめられました。

松園の印章に見られる「園」の字はこのうち、『古文四声韻』に掲載されています。つまり、ここで用いられている書体は、印章で主に使用される「小篆」ではなく、それよりも古い時代の書体なのです。

ところで、松園のこの印に見られる「園」の字は、他の画家や文人の印章にも認められます。たとえば、自ら篆刻もよくした江戸時代中期の文人画家・柳沢淇園の「淇園」印や、江戸時代後期の文人・太田南畝の別号「杏花園」を刻した印、さらに松園と同じく近代において多くの女性像を描いた島成園の印章にもこの書体の「園」が使われています。しかし、これらの印章ではいずれも偏の「八」の下に点が打たれていますが、松園の印や『古文四声韻』掲載の文字にはそれが見られません。

江戸時代以来、日本で印章を作る際に参考にされた字典類には、先に挙げた『説文解字』のほか、黄檗僧・東皐心越が中国よりもたらした『韻府古篆彙選』（陳策撰、和刻本：正徳3（1713）年）や、江戸時代中期の篆刻家・池永道雲の著した『聯珠篆文』（享和2（1802）年序）、明の林尚葵、李根の撰になる『広

金石韻府』(元文2(1737)年)などがありますが、いずれも「八」の下に点を打った文字が掲載されています。ではなぜ、松園はあえて点のない文字を採用したのでしょうか。

松園は自らの雅号の由来について、自著『青眉抄』のなかで、師である鈴木松年から「松」の一字をもらい、また自身の家がやっていた葉茶屋の取引先に、銘茶のとれる茶園があったことにちなんで「松園」としたと語っています。つまり、「園」の字は松園にとって、自らのアイデンティティに関わるものであったといえます。このことは、松園の次の言葉からも窺えます。

例えば妾が松園と言へば、東京にも大阪にも園、園と沢山に似交つた雅号の作家が出る様な有様であります。仮令雅号の様なものでもが自己本来の固有なものに目醒めて来なければなりません(『芸苑』1-9、大正9(1920)年2月)

雅号に「園」のつく女性画家は、明治時代に限ってみても、ざっと20人以上います。松年門には松園のほか、松田竹園、中井梅園、土田喜園がおり、とくに松園と竹園、梅園は松年門の松竹梅として人気を呼んでいました。また、明治20年代にはすでに、日本美術協会で活躍した内藤文園や村田丹陵の妹・村田紫園らがおり、30年代には榊原(池田)蕉園や、日本美術協会や日本画会などへ出品した水谷清園が、さらに40年代には島成園らが出てきます。なかでも東京の池田蕉園、大阪の島成園は松園とおなじく女性像を得意とし、ともに官展で活躍したことから、三園などと呼ばれました。また、大正4(1915)年9月29日付の『読売新聞』には、制作中の松園の写真とともに、「文展出品画「花がたみ」を描きつつある上村蕉園女史」と、池田蕉園との混同が窺える見出しの記事が掲載されています。さらに大正5(1916)年11月、当時の皇后陛下が文展へ行啓された際の御前揮毫では、予定していた画題が池田蕉園のものとかぶっていたため、松園は画題を変更して揮毫に臨んだといえます。

その後、大正11(1922)年頃より使われはじめたこの印章には、古い書体、それもより原典に近い形の「園」の字が用いられました。小さな印章のわずかひと文字ではありますが、そこには松園の矜持や意気地といったものが、込められているように思われます。

(文化財情報資料部 田所泰)

Digest

Letters inscribed on one of the seals of the Japanese-style painter, Uemura Shoen, have not been deciphered until recently, when it was discovered that the inscription reads: Shoen. Interestingly, for the letter “en (園),” that relates to the identity of Shoen, an old font, or rather a font close to the original font, is used. It is assumable that Shoen wanted to imbue the seal with the pride and spirit of the original, different from the other women painters surrounding and blindly following her at that time. (Tai TADOKORO, Department of Art Research, Archives, and Information Systems)